

スピノザにおける個体概念の展開と断絶

——『短論文』から『エチカ』へ——

真野 雄大

序

本論は、17世紀オランダの哲学者スピノザにおける個体の概念を主題に、初期著作『神、人間およびその幸福についての短論文』（以下『短論文』）と主著『幾何学的秩序で証明されたエチカ』（以下『エチカ』）の検討から、彼の個体概念の変遷を、断絶を孕んだ展開の形で提示することを目指す。これら何れの著作にあっても、神のみを唯一実体とする体系において、個物ないし個体¹の何たるかを定義することの一つの要諦は、運動と静止という延長属性の様態を通じて、実体ならぬ様態として個体を概念せしめる点に存すると言えよう²。本論が以下で確認するだろう、こうした初期以来のスピノザの個体把握の一貫性は、然るに、両概念の同一視の可能なることや、また単純な連続的展開の下に両概念を迫り得ることを、必ずしも意味しまい。先行研究の多くは、『短論文』における個物の規定たる運動と静止の比 *proportie* についての「1 対 3」³なる数の比の例を借り、『エチカ』の個体の規定たる運動と静止の比＝関係 *ratio* の解釈に援用するか⁴、或いは主著の個体概念を解釈する関心から、初期の単純な規定の方は『エチカ』では棄却される或いは複雑化すると整理してきた⁵。ただその中でも、マトウロン

1 『短論文』について本論が取り上げる個物 *bezonder ding* は、語としては『エチカ』の *res particularis* に先ず以て対応するが、本論では、運動と静止の観点から定義される点などの共通性の故に、『エチカ』の個体 *individuum* と比較可能なものと見て、それらの変遷を考察していく。

2 個物や個体の何たるかは、延長属性の様態たる物体を題材にして規定されるが故に、個物や個体なるを以て本論は、物的な個物、個体を考察することとする。

3 KV 2/VR, 註 2 の 12。

4 例えば Lachterman 1978, 85–86。ギャレットは逆に、『短論文』の比の例を真に受けるべきものとして挙げられてはないと見て、『短論文』の個物の概念の方を『エチカ』のそれへと同一化する（Garrett 1994, 86–87）。

5 例えば Garber 1994, 54; Sangiacomo 2019, 135。後者は、他からの区別のみを説明する『短論文』の比の概念が『エチカ』では棄却され、個体の内的構造を表す比＝関係 *ratio* の概念に代わられると整理するが、本論 1 節で見る如く『短論文』の比概念は、他からの区別のみならず、個物が変化を受けつつ維持する同一性をも把握せしめる概念である。

やズーラビクヴィリは、『短論文』においては運動と静止の間の比、対して『エチカ』においては諸部分間の運動と静止の関係＝比 *rapport* により個体が規定されるという違いを指摘する⁶。我々の見通すところ、主要諸概念の体系的再編成の総体的描述を通じてこそ十全に把握され得よう、両著作の個体の概念の変遷の、その一端の解明を目指して、本論は、マトゥロンらの指摘する違いを一つの目印にしつつ、個体の規定に含まれる運動・静止の意味や、諸物体間の因果関係を視角に、断絶を孕んで展開しゆくスピノザ個体概念を立体的に浮かび上がらせ、以て『エチカ』のそれへと結像しゆくスピノザの個体概念を理解する一助とした⁷。

以下、『短論文』における、運動と静止の比を以て規定される個物の概念を再構成した後〔1節〕、運動と静止概念の検討を介した上で、『短論文』の個体概念の諸特質を取り出す〔2節〕。次に『エチカ』における、諸物体間の運動と静止の関係 *ratio* として定義される個体の概念の諸相を抽出し〔3節〕、これらの分析を踏まえ、諸物体同士の因果関係が個体の定義に先行する点に、両著作の個体概念の諸差異を一挙に齎す出処を見定める形で、スピノザ個体概念の断絶を孕む展開を描く〔4節〕。

1 『短論文』における個体概念の基礎の整理：運動と静止の比

まずは『短論文』第2部の註と付録に見出される個物を主題的に扱うテキストを確認し、その個物の概念を再構成する。

『短論文』は個物の本性を、運動と静止の比 *proportie van beweging en stilte* によって規定する。「それら〔諸個物、諸物体〕の多様は専ら、運動と静止のそ

6 Matheron 1969, 39; Zourabichvili 2002, 51. 尤も、前者は個体の規定として、『短論文』を基にした、一定数の諸部分の運動量と静止量との各総和の比を表す単純な「式 F」と、『エチカ』を基にした、一定数の諸部分間の運動の伝達の仕方を表現するより発展的な「式 F'」とを提示しつつ、両者を結局交換可能と見る (Matheron 1969, 38–43)。

7 一点注記すれば、『短論文』における比概念に拠る個物の規定は、悉く第二部の註と付録に偏在する。註や付録が本文より後に付記されたという本書成立の経緯 (Mignini 1984, 97–99; 797–800) を思えば、本文層での個物規定の不在ないし未確立の意義も考察されるべきである。だが本論は紙幅の都合から、比概念を以て明示的に規定された個物のみを考察する。故に本論が『短論文』について扱うのは新しい層に属する限りの個体概念であることを、ここに断る。言うなら、両著作間での個体の変遷を十全に辿るには、『短論文』本文、その註や付録、『エチカ』の三層の識別が必要となろう。こうした三段構えの包括的考究は別稿で試みたい。

れぞれに異なる比によって生ずる」⁸。「[...] 各々の個別的な物体的事柄は運動と静止の一定の比に他ならぬことを、証明された事柄として想定しよう」⁹。この運動と静止の異なる比によって、「これはそうであつたりなかつたりし〔「これ」の変異〕、これはこれであつてあれでないのだ〔「これ」と「あれ」の異なり〕」¹⁰。即ち、一個の個物は、その比の同一を以て同一であり¹¹、またその比の違いを以て他とは異なるその個物として区別される。このように『短論文』は、運動と静止の一定の比を以て、他から区別され同一性を有する個物を定義する。

加えて、運動と静止の比の概念には、個物が同一のまま受け得る変化に関する規定も含意される。即ち、運動と静止との間の変動（運動の増大と静止の減少、及び運動の減少と静止の増大）から熱と冷の各感覚が説明される¹² 如く、個物において運動と静止は増減する仕方で、釣り合つて *geproportioneert* 協働し *concurreren*¹³ ながら変動し得るが、その比が定める範囲を超えぬ限り、変化を通じて個物の同一性は保たれる。「そこで、例えば 1 対 3 というこの自身の比を持ち維持する物体は、[...] 絶えず変化を被りながら、それは 1 対 3 の範囲を超え出ゆく程大きくならない」¹⁴。こうした変動からの元の比への回帰は、快活の喜びを齎す¹⁵。だが、「他の物体が過度に激しく我々の身体に働きかけ、1 対 3 の運動の比が保たれ得ぬ」時、それは個物の死を意味する。かくの如く運動と静止の比の概念は、本来的状态を定めつつ、運動と静止の増減的変動の可能性を拓き同時に変動の限界を与えることで、同一のまま変化し得る個物を把握せしめる¹⁶。

8 KV 2/VR, 註 2 の 8。亀甲括弧内は引用者による。

9 KV Ap.2, 14。

10 KV 2/VR, 註 2 の 8。

11 人間身体は、胎児時や死後には運動と静止の異なる比をとる (KV 2/VR, 註 2 の 10)。

12 「これら二つの様態の一方（運動か静止）が増大へと或いは減少へと変化するなら、その度合に応じて観念もまた変化する。例えば、静止が増大し運動が減少することになると、我々が冷と呼ぶ苦痛ないし悲しみがそれによって生じ、反対にこのこと〔増大〕が運動において起こると、我々が熱と呼ぶ苦痛がそれによって生ずる、という如く。」(KV Ap.2, 15)

13 KV 2/20, 註 4。

14 KV 2/VR, 註 2 の 12。

15 KV Ap.2, 16。

16 ズーラビクヴィリは、運動と静止の比が定める平衡状態に、そこからの逸脱としての感覚の潜在的致死性、及び強すぎた感覚としての死という諸含意を見て取る (Zourabichvili 2002, 59)。我々は、彼に倣って比概念の定める平衡状態、及び感覚と苦との密接性を見るが、他方、この平

纏めれば、『短論文』において個物は、他から確と区別され、同一性を保ったまま変化を受け得るものとして、運動と静止の一定の比を以て定義される。ここで運動と静止の比が、その個物において増減の形で互いの間で釣り合いながら変動し得る、運動と静止との間の比であることを確認しておこう。次節では、個物の概念の含む運動と静止概念を検討した上で、その運動と静止の比として定義される『短論文』の個物の呈する諸特質を取り出す。

2 『短論文』の個物概念の諸特質：運動と静止概念の検討を通じて

第1部第二章註19に目を向けよう。この註は、神に延長を属性として帰すことから惹起される神の分割可能性の嫌疑、殊に運動をめぐるそれに対し、運動概念の再提出を通じて、神への延長の帰属を正当と弁ずる、論争的形態をとる。反論との対峙から運動と静止概念が析出してくる現場に臨み、その意味を見定めたい。

無限なる実体的延長の中には延長がそれへと分割されるような部分も全体も無いと主張した後、スピノザは、運動を争点に生じ得る反論を想定する形で続ける。

〔…〕だが貴方はこう言うかもしれぬ。あらゆる様態に先立っては延長に何らの部分もないのか。決してない、と私は言う。しかし、と貴方は言う、もし物質の中に運動があるなら、それは物質の部分の中にあるのでなければならない。何故なら、全体は無限だからして、全体の中にはないからだ。というのも、実にどこに向かってそれは運動するというのか。その外部には何もない。従って、部分の中にあるのだ。答え。運動だけがあるのではなく、運動と静止の一緒になったもの *beweging en stil te zamen* があるのだ。そしてこれは全体の中にあり、またあらねばならぬ。というのも、延長の中に部分は決してないのだから。〔…〕（KV 1/2, 註19）

ここでは、運動が部分を前提するだろうという反論を受け、延長の分割不可

衡状態それ自体を静止、そこからの逸脱を運動とする、また別の運動と静止の意味を読み込む（Zourabichvili 2002, 55–56; 63）必要はないと考える。更に彼は、この平衡状態としての静止に、個物の諸部分間の静止し合う関係としての合一の意を重ねる（Zourabichvili 2002, 60; 63）が、『短論文』にそうした諸部分間の静止から個物を捉える箇所はない。

能を損なわず寧ろ肯定・定立することが運動概念に要請される中で、その要請に耐え得る運動概念が形成、提示されていると言える。反論者とスピノザとの運動の把握の相違を整理しよう。

反論者において運動は、外部無き無限な全体が運動する可能性が否定される点から判る如く、運動の帰属する物体がどこかへ移動することとしての、外部を前提にした運動である。またこの運動は、運動という様態が帰属する物体を前提にする。だから運動を認める限り、無限な延長には運動する部分があり、かくて延長はそれら部分へと分割可能である、と反論者は論ずる。

応答者スピノザは、延長の分割不可能を擁立すべく運動を否定する道を採用はしない。また彼は外部無き無限な全体がどこかへ移動的に運動することの不可能も、反論者と共に認めるだろう。そこで全体の中にあり得るものとして見出されるのが、組になった運動と静止である。即ち、どこか外部へと運動する部分を前提せずに、神を構成する無限なる全体の中にあり得るものとして提示されるのが、運動ならぬ、運動と静止である。

ところで、この全体の中にある運動と静止は、延長の普遍的所産自然 *algemene Natura Naturata*¹⁷ と見做し得る。個別的所産自然たる個物と対を成す普遍的所産自然¹⁸ は、神に直接依存し、永遠、不変、無限性の特徴をもつ様態であって、個物の原因とされる¹⁹。かくて延長においては、神が直接生ずる運動と静止から、運動と静止の一定の比たる個物が生み出される。

さて、註 19 が拒むのは「様態に先立つて」ある部分だったが、スピノザは、先立つ物体を前提とする運動の概念から分別された、運動と静止概念を確立した後に、ではどういう部分ならば延長に見出し得るか、明確に論じていない。だが、先に見た個物の定義は、運動と静止概念に後続する、延長の中に許容され得る部分を与える概念として解せよう。即ち、運動ならぬ運動と静止概念の確立に呼応して、その一定の比として規定されることで、個物は、運動なる様態が前提とする物体ではない、延長の普遍的様態たる運動と静止に後続するものとして様態性を担保され、故に神的延長に確かに存立し得るものとして概念され

17 KV 1/9, 1. 但しこの箇所は「運動」を延長の普遍的所産自然の例として挙げる。『エチカ』における神から直に産出される所謂直接無限様態については、延長属性のそれとして書簡 64 が「運動と静止」の例を挙げる (GIV, 278)。

18 KV 1/8。

19 KV 1/8; 2/5, 2。

る。つまり個物は、運動とその前提としての物体という運動・物体観を斥けるところに、延長の不可分性を肯定する形で、運動ならぬ運動と静止の、その一定の比として規定される。

かように『短論文』における個物は、延長の普遍的所産自然たる運動と静止の、その一定の比として規定されることで、様態であることを根拠付けられつつ、他とは別箇のものとして同一性をもった、互いの間で増減する運動と静止を通じて変化し得るものとして、概念される。以上に基づいて、特に『エチカ』の個体概念との比較において際立とう、『短論文』固有の理論的状况を示す個物の特質を、1/ 運動と静止、2/ 個物の部分、3/ 他の諸個物の各観点から取り出そう。

1/ 先ず、運動と静止の比という定義の含む運動と静止が、物体が外部を前提にして移動の形で運動・静止することとしての運動や静止とどう関わるのか、不明であるという点だ。即ち、今見た如く、運動と静止概念は、物体の移動的な運動の概念から区別されるところに存立するのだった。しかしこの、実体の不可分性に抵触しない個物の把握を可能にする概念的区別の故に、運動と静止の比と言われる際の運動と静止が、物体の移動的な運動や静止と関連を断たれたままとなっている。また成程『短論文』は、それを通じて他の物体と衝突し合うような、移動的な意味での運動や静止にも言及する。「それ〔静止する石〕が持つ静止よりも大きな運動を持つ他の石がそれを運動させ」、「運動する石は、より少なく運動する他の物体によってのみ静止するに至る」²⁰。だが、当議論の中で、個物の規定たる運動と静止の比は論じられることなく、故にやはり、こうした移動的な運動は個物の規定の文脈の中で位置づけを明確に与えられていない。このように、個物の規定に含まれる運動と静止は、物体が運動・静止することから遊離して、互いの間で増減しながら釣り合うものとなっている²¹。

20 KV 2/19, 8。ズーラビクヴィリはここに、或る物体を運動・静止させるのに必要な静止量・運動を以て定められる、運動と静止の比概念の一意味が見て取られ得る可能性を述べる（Zourabichvili 2002, 52; 63）が、そもそも『短論文』の当該箇所は、比概念に拠る個物規定が登場しない、本文層に属する。『短論文』内に分別すべき成層については脚注7参照。

21 一個物が、全体として運動することを通じて規定されるのではない点も、個物の定義の含む運動と静止の、移動的な運動からの遊離の一面として挙げられる。デカルト『哲学原理』第二部は、一物体を、共に運動することを以て規定する。即ち、「物質の一部分または一物体の、直に接触し且つ静止していると見られる物体の隣から他の物体の隣への移動 *translatio*」として定義される運動に、共に与る「同時に運ばれるすべて *omne quod simul transfertur*」が、一物体である（AT VIII, 53–54）。他方、『短論文』における個物は、成程一個の物体として運動し得ようが、そうした運動によってこそ一個の個物として規定されるのではない。寧ろ運動と静止の比による

2/ 次に、個物の規定における個物の部分の概念の不在である。部分に先立って全体の中にある運動と静止概念に依拠した、運動と静止の比としての個物の規定は、個物の部分への考慮の介在無しに、一個の個物を把握せしめる。成程『短論文』においても個物が諸部分を持たないわけではない²²、マトゥロンの如く個物を規定する運動と静止の比を、その諸部分の持つ運動量と静止量の各総和の間の比と解釈し得るかもしれない²³。然るに、個物の何たるかの規定に個物の部分が関与せず、また相互間で比をとって協働する運動と静止が、諸部分の持つ運動や静止に依拠して規定されるのでない点こそ、『短論文』の個物概念の特質として観取されるべきだ。

3/ 最後に、個物の規定における他の諸事物の非介在である。成程、運動と静止の比を以て、外部の他の物体からの区別は説明されるし、また個物は他の物体と常に共に実在すると考えられる。しかし、運動と静止の一定の比としての個物の規定のうちに、個物の外部が参照され介在してくることはない。この特質もやはり同様に、個物が全体の中にある運動と静止との関連で、その一定の比として規定される点から帰結している。

このように『短論文』においては、個物の定義に、移動的な運動・静止や諸部分、その他の諸事物は構成的な仕方で関与することなく、個物の本性は単に、移動的な運動や静止から抽離して互いの間で釣り合う運動と静止の比に求められる。そしてこれらの特質は何れも、個物が、全体の中にある運動と静止に言わば直に概念的に接続され、その一定の比として定義される点に由来していると言える。こうした諸特質を押さえたところで、続いて『エチカ』に目を転じたい。

3 『エチカ』における個体概念：諸部分間の運動と静止の関係

本節は、スピノザの個体概念の変遷を解明するための残る予備的作業として、

個物の規定のほうが、一個の個物として移動的に運動することの可能を根拠づけていよう。尚、『哲学原理』第二部における運動と個体化との関係、そこに含まれる定義の循環などの諸問題については、Garber 1992, 175-81 参照。

22 身体各部における感覚の違いを説明すべく、或る部分が他の部分より多くの運動と静止をもつと言われるように (KV Ap.2, 16)、個物の諸部分が運動と静止との関連の下で論じられることもある。しかしやはり、個物が運動と静止の比として、こうした様々な度合で運動と静止をもつ部分の概念無しに規定され、また後にそれとの関連付けが為されることも無い点に、次節で見る『エチカ』の個体の定義と明確に異なる、『短論文』の個物規定の固有の状況を示す特性がある。

23 脚注 6 参照。

E2P13 後の個体論の要点を必要な限りで抽出する。まずは個体の定義を引こう。

定義：同じ或いは異なる大きさの幾つかの諸物体がそれ以外のものどもにより取り囲まれることで、相互に寄りかかるようになっている時、或いはもしそれら諸物体が同じまたは異なる速さの度合いで運動しているならば、それらが自己の運動を相互に或る一定の関係 *ratio*²⁴ において伝達するようになっている時、それら諸物体は相互に合一していると我々は言い、そしてそれら一切が同時に一つの物体ないし個体を複合していると言う。この一つの物体ないし個体はそれ以外のものどもから、これら諸物体の合一により区別される。
(E2P13Def)

言うなら、『エチカ』はこのように個体を、運動を介して諸物体から複合される一物体として定義する。本定義に関して指摘すべき点として第一に、諸物体はそれ自身静止しているか、自己の運動を互いに伝達しているかとある如く、ここでは物体の移動的な運動・静止が俎上に載せられている。

第二に、諸物体が持つ自己の運動を他の物体と伝達する関係 *ratio* によって、諸物体の合一が、ひいてはその合一を形相とする²⁵ 一物体ないし個体が規定される²⁶。定義にあるように他の諸物体からの区別を与える、この諸物体の運動伝達の関係 *ratio* は、諸部分の相互に対する運動と静止の関係 *ratio motus et quietis* とも言われ²⁷、この関係 *ratio* の同一を以て個体の同一性は説明される。かくてこの関係 *ratio* が同一である限り、個体は部分の交換や部分の増大減少などの変化を、同一の個体のまま受け得る²⁸。注意すれば、この関係 *ratio* は、諸物体間に成り立つ、諸部分の相互に対するそれであり、運動と静止との間の

24 *ratio* は比とも訳し得る語だが、本論は、後述のようにこの *ratio* が、『短論文』で1対3と例解される如き運動と静止の間の比ではなく、運動を伝達し合う諸物体間に成り立つものである点を表現すべく、関係と訳す。

25 E2L4D 等。

26 確かに個体の定義では、諸物体の相互的静止による合一と相互的運動による合一とが区別され、後者にのみ *ratio* の語が対応する。ただ本論はマトゥロンに倣い (Matheron 1969, 42)、相互的静止を、一定の関係 *ratio* における相互の運動伝達の極と見做し、二種の合一の間には程度の差のみがあると解しておく。

27 例えば E2L5D。

28 E2L4-7。

それではない。

第三に、他の諸物体による取り囲みが個体の定義に含まれる。存立した個体がそれを取り囲む他の諸物体との不可避的關係に入りゆくというよりは寧ろ、他の諸物体に取り囲まれながらそれらから区別されるところに存立するものとして、個体は定義される。

さて、本定義に先立つ E2L3 が論ずる如く、諸物体間での自己の運動の伝達は、無限に連鎖する因果関係を成す。「運動し或いは静止している物体は、他の物体から運動或いは静止へと決定されたのでなければならず、この物体もまた他の物体から運動或いは静止へと決定されたのであり、そしてこの物体もまた他の物体から、と無限に続く」。E2L3 の一根拠 E1P28²⁹ が提示する属性に中立的な因果の無限連鎖を、延長属性下で展開したものが、諸物体の自己の運動の伝達という形式における因果の無限連鎖であると解される。

最後に『エチカ』は最単純物体 *corpora simplicissima* 概念を持つ。諸部分間の運動と静止の關係 ratio により区別される個体とは異なり、その運動と静止、速さと遅さのみにより相互に区別される³⁰ この非複合体は、移動的な運動や静止が運動・静止するところのものとして前提とするのでない、寧ろその運動や静止を通じて他から区別されて存立する³¹、実体ならぬ様態である。こうして延長全体の中にある運動と静止概念³² に後続し、その概念のみを通じて存立するこの様態は、己を他から区別せしめる運動を他と因果的に伝達し合うことで、個体を複合する諸部分たり得る。

以上『エチカ』による個体の定義の諸相として、移動的な運動の主題化、諸部分間の運動と静止の關係 ratio、他の物体による取り囲み、諸物体の運動伝達が成す無限なる因果連鎖、最単純物体、の 5 点を確かめた。ここまでの議論を踏まえ次節では、『短論文』から『エチカ』への、断絶を孕んだ個体概念

29 「個別的なもの、換言すれば有限であり規定された實在を有するものは何であれ、これまた有限であり規定された實在を有する他の原因によって實在し作用するよう規定されるのでなければ、實在することも作用するよう規定されることもできない。そしてこの原因もまた、〔…〕。こうして無限に続く。」

30 E2L1、及び個体定義直前の A2。

31 マシュレは、運動から物体へと推論は進むのであり逆であってはならないと述べて、諸物体を区別せしめ同時に連繋させる運動・静止の、物体に対する先行を見て取る (Macherey 1997, 138-39)。

32 運動と静止が『エチカ』では直接無限様態に当たろうことは、脚注 17 参照。

の展開を示す。

4 『短論文』から『エチカ』へ：個体概念の展開と断絶

運動と静止の間の比として個物を定義する『短論文』も、諸部分間の運動と静止の関係 ratio として個物を定義する『エチカ』も、運動と静止の観点から、様態性とはからの区別、同一性と変化可能性を根拠づける仕方で個物ないし個体を定義する点で、確かに共通する。この限りにおいては、スピノザの個体把握に、初期からの一貫性を見て取ることができる。然るにこの一貫性の下での展開には、諸々の差異が亀裂として刻まれている。

我々は、両概念の諸差異の中で最も基層にあるのは、当概念の定義に際し、諸物体間の因果関係が前提されるか否かの差異であると主張する。『短論文』では、確かに個物は普遍的所産自然たる運動と静止との間に原因結果の関係を持つにせよ、運動と静止の比による個物の規定に、諸物体の因果関係は介在しない。対して『エチカ』では、前節において見た如く、諸物体が相互的に運動伝達することとしての因果関係の無限の連鎖が、個体の定義に先立ってその底流を成す³³。

個体の定義に先立つ諸物体間の因果関係の導入という変化から、両概念間の他の諸変化を辿ることができよう。1/ 運動と静止、2/ 部分、3/ 他の諸事物の三点から、順に確かめる。

1/ 移動の意での運動・静止の統合：『短論文』では運動と静止概念との関連の不明の故に、運動と静止の比としての個物の定義に位置を得なかった、物体の移動的運動が、『エチカ』では、諸物体がそれを以て相互的因果関係を結び、またその因果関係において伝達されるところのものとして、主題化される。そしてこの物体の運動は、諸物体が一定の関係 ratio で伝達し合うところのものとして、個体の定義の内に統合される。かくて、直後にも見る如く、『エチカ』の個体の規定の含む運動と静止概念は、移動的な運動と静止としてその意味を充実される。

2/ 部分の前景化：因果的に伝達される運動の前景化は、自ら運動しその運動

33 秋保もまた、因果関係論から個体の定義へという議論構成を見、因果関係の只中に個体の定義の場面を位置づける形での整理を提示している。その際特に法則 lex 概念に着目し、一般的法則から個体の本性の法則までを貫く当概念を通じて、最単純物体論と個体論の連続を描いている（秋保 2018, 129-34）。

を因果的に伝達するところの諸部分の前景化と同時である。即ち『短論文』では、運動と静止の比としての個物概念の定立にその個物の諸部分は寄与せず、また比は運動と静止の間で成り立つものだった。他方『エチカ』では、諸物体が諸部分として互いに運動伝達する関係 ratio、ないし諸部分の相互に対する運動と静止の関係 ratio を以て定義される個体は、運動伝達の因果と共に前景化した、相互作用し合う部分の概念無しには把握されない。ここに至って運動と静止の関係 ratio は、運動と静止との間の比の意ではなく、諸部分が因果的相互作用として互いに運動・静止させ合う、諸部分間の関係 ratio の意となろう。そして、その運動と静止の意は、諸物体が持つ移動的な運動や静止以外ではなくなる。このように、個体を規定する関係 ratio が運動と静止のものではなくなるのは、個体論における諸物体の因果関係の導入に伴う、部分概念の前景化に由る。

3/ 他の諸事物の介在：更に『エチカ』の個体は、『短論文』の如く運動と静止の一定の比として、他の物体の介在無しに端的に定義されるでなく、諸物体間の因果関係を前提にした、他の諸物体からの取り囲みに、不可避免的に先立たれる。運動伝達の因果関係は無限の連鎖を成すのだからして、『エチカ』の個体定義における、諸物体を囲む他のものどもは、連鎖的に無限に広がる。従って、この無限に連なる運動伝達の因果関係内において、或る一定の関係 ratio で己の運動を伝達する一群の諸物体が、その関係 ratio によって規定される一個体を複合する。このように、諸部分間の関係 ratio による個体の規定は、諸物体とその周囲との因果的無限連鎖を前提に、その連鎖内で他のものから区別されるところに、一個の個体を定める。ここで個体の概念は、他の諸事物との関係の中でも確かに存立し得るものとして、またそうした関係の中でしか存立し得ぬものとして、個体を把握せしめるものとなっている。

さて、ゲルーが『短論文』での不在を指摘する最単純物体³⁴について言えばそれは、『短論文』が既に見出していた延長全体の中にある運動と静止から、個体の定義の基底を成す因果関係へと架橋する、概念的装置として機能していると解せる。即ち、この非複合体は運動と静止のみにより区別されるものとして、全体の中にある運動と静止のみに依拠して見出される様態だった。これらの物体は、己を区別させ存立せしめる運動や静止を、まさにその運動や静止を通じて他と相互に伝達し合う、そういった因果関係を常に成している。そしてこの因果関係を結び合う最単純物体が、諸部分として個体を複合してゆくのだった。従っ

34 Gueroult 1974, 562。

て、運動と静止の観点からの、諸物体相互の因果的関係を前提にした『エチカ』の個体の定義は、運動と静止のみから見出され、己の運動と静止を通じて相互的因果関係を必然的に取り結ぶ、最単純物体の概念を介してこそ可能になっている³⁵。

以上、諸物体同士の因果関係が個体の定義の前提を敷くようになるという変化から、初期以来の連続性をも一面には示す個体概念の含み持つ、諸々の変化を明るみに出した。言うなら、初期著作から主著へかけて、スピノザの個体把握は、個体の定義に先行する因果関係の導入という変化を発生源とする、運動、部分、他の諸事物をめぐる断絶に印付けられて、展開していくのである³⁶。

結

ここまでを振り返れば、『短論文』において個物は、運動と静止の比として定義された。この定義は、運動と静止の観点から、様態でありながら他から区別され、同一性と変化可能性とを備えるものとして、個物を概念せしめる。こうした個物把握の眼目は、主著に至るまで一貫して維持されていく。ただ、そこで個物は、延長全体の中にある運動と静止に依拠して、移動的な運動や静止から遊離した互いの間で釣り合う運動と静止の比によって、個物の諸部分や外部の介在無しに規定された。対して『エチカ』では、全体の中にある運動と静止を、移動の意味で運動し静止することへと即座に展開せしめる、最単純物体概念の導入に依拠しつつ、運動・静止することを通じて互いに運動・静止させ合う諸物体間の因果関係が、個体の定義の前提を形成するようになる。この因果関係に立脚して、『エチカ』の個体は諸部分間の運動と静止の関係として定義される。

35 両著作の個体概念の変遷を一視座に、最単純物体概念の意義を論ずることも可能だろう。スピノザ哲学における当概念の意義や諸問題の多面的分析は、別稿で試みたい。

36 個体定義に対する諸物体間の因果の先行という『エチカ』の議論構成の成立のためには、最単純物体概念の確立に加え、無限と有限をめぐる因果論の深化も肝要だろう。即ち『短論文』は無限なる普遍的所産自然から諸個物が産出されると述べるが、『エチカ』では、直接無限様態の結果は同じく無限な間接無限様態であって、有限な個物は他の有限な個物と因果関係をもつ（E1P21-23, 28）。間接無限様態は個物 *res particularis* に他ならぬとし、無限者から個物が産出される『短論文』の因果の『エチカ』への踏襲を見る佐藤の独特の解釈（佐藤 2004, 1-66）の検討も含めて、初期著作から主著にかけての有限・無限概念と因果論の変遷の考究は、今後の課題の一つとしたい。その際、『短論文』の個物とは異なり『エチカ』では個体 *individuum* の概念が無限性を許容するようになる（E2L7S）という、本論で扱い得なかった論点も、併せ考えられるべきだろう。

即ちそこで個体は、無限の因果連鎖内の一群の諸物体が一定の運動伝達の関係 ratio を結ぶことで、周囲の他の諸物体と因果的に交わりながらそれらから区別される地点に、その関係 ratio を以て定義される。かように『短論文』から『エチカ』へかけてのスピノザの個体概念の展開の途上には、個体論に先立つ諸物体間の因果関係の導入に起因して、運動、部分、他の諸事物をめぐる亀裂が走る。序で言及した、運動と静止の間の比か諸部分間の運動と静止の関係かという違いは、この断絶を孕んだ展開の、一つの現れに他ならない。

最後に問いを掲げて結びとしたい。『エチカ』に至って確立された、諸事物間の因果が個体の規定にとって前提を成すという議論構成、即ち因果性の個体性に対する先行は、何を意味するか。知の存立と因果の存立とに相即を見るスピノザの公理³⁷を想起すれば、個体の知解可能性がここに含意されようが、第三種認識が個物についての認識である³⁸ことと併せて、彼の個と知をめぐる思惟はどれ程の特異性と意義を持つか。普遍の水準に知の成立を見る伝統からすれば逆説的にも映ろう、因果性を介した個と知をめぐるスピノザの思惟が、個とは何か、知とは何かという問題系の中でもつ哲学史的意義を測る作業、殊に、原因概念の近世的変容³⁹の中でスピノザ哲学における原因の意味を見定めつつそれを測る作業、端的に言うなら、原因、個、知の三項より哲学史を見返し、スピノザの思惟の位置を測定・評価する作業が、今後の課題である⁴⁰。

一次文献と凡例

Descartes, René. *L'Œuvres de Descartes*, publiées par Charles Adam, Paul Tannery, Vrin, 1964–74 (11 vol.). [AT の記号と巻、頁数を以て指示する]

Spinoza, Baruch de, *Opera*, Im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften herausgegeben von Carl Gebhardt, C. Winter, 1925 (4 vol.). [G の記号と巻、頁数により指示する。但し『エチカ』については慣例に倣い、部と定理等の種別（例えば P は定理、L は補助定理を指す）及びその番号を表す略号を以て指示する]

Spinoza, Baruch de, *Œuvres*, t. I: *Premiers écrits*, édition publiée sous la direction de Pierre-

37 「結果の認識は原因の認識に依存しこれを含む」(E1A4)。『知性改善論』曰く、真の知は原因から結果へと進む (G II, 32)。『短論文』にこの公理は見出されない。

38 E5P36S。

39 アリストテレス的四原因のうち作用因を特権化したスアレスに発し、神と原因性の問題を一争点とした変転を経て、最終的に充足理由律の定立に至る、原因と理由概念の近世史については、Carraud 2002 を参照。

40 本稿はスピノザ協会第 74 回研究会 (2024 年 12 月、於玉川大学) にて口頭発表した際の前稿を改稿したものである。当日コメントやご質問を下された方々に御礼申し上げたい。

François Moreau, PUF, 2009. 〔『短論文』のテキストは、部・章と、ジクヴァルトによる節番号を以て指示する。尚、VR は序言、Ap は付録を指す〕

二次文献表

- Carraud, Vincend. 2002. *Causa sive ratio : la raison de la cause, de Suarez à Leibniz*, PUF.
- Garber, Daniel. 1992. *Descartes' Metaphysical Physics*, The University of Chicago Press.
- Garber, Daniel. 1994. "Descartes and Spinoza on persistence and conatus," *Studia Spinozana*, 10, 43–68.
- Garrett, Don. 1994. "Spinoza's Theory of Metaphysical Individuation," in *Individuation and Identity in Early Modern Philosophy : Descartes to Kant*, Jorge J. E. Gracia, Kenneth F. Barber (ed.), State University of New York, 73–103.
- Gueroult, Martial. 1974. *Spinoza II : L'âme*, Aubier-Montaigne.
- Lachterman, David R. 1978. "The Physics of Spinoza's Ethics," in *Spinoza : New Perspectives*, Robert W. Shahan, John Biro (ed.), University of Oklahoma, 71–111.
- Macherey, Pierre. 1997. *Introduction à l'Éthique de Spinoza, La deuxième partie : La réalité mentale*, PUF.
- Matheron, Alexandre. 1969. *Individu et communauté chez Spinoza*, Éditions de Minuit.
- Mignini, Filippo. 1986. "Introduzione" e "Commento," in *Korte Verhandeling van God, de Mensch en deszelvs Welstand / Breve Trattato su Dio, l'uomo e il suo bene*, Introduzione, edizione, traduzione e commento di Filippo Mignini, Japadre, 11–118; 367–800.
- Sangiacomo, Andrea. 2019. *Spinoza on Reason, Passions, and the Supreme Good*, Oxford University Press.
- Zourabichvili, François. 2002. *Spinoza. Une physique de la pensée*, PUF.
- 秋保 亘. 2018. 「スピノザ『エチカ』「物体の小論」における身体論の射程：「個体」と「形相」の概念を中心に」, 『哲学』, 69号, 125–39.
- 佐藤 一郎. 2004. 『個と無限：スピノザ雑考』, 風行社.